

『文選集注』江淹「雜體詩」訳註（五）

郭弘農（遊仙）璞

重野 宏一

- 01 崦山多靈草
- 02 海浜饒奇石
- 03 偃蹇尋青雲
- 04 隱淪駐精魄
- 05 道人誦丹經
- 06 方士練玉液
- 07 朱霞入窓牖
- 08 曜靈照空隙
- 09 傲睨擗木芝
- 10 凌波采水碧
- 11 眇然万里遊
- 12 矯掌望煙客
- 13 永得安期術

崦山 靈草多く
 海浜 奇石饒かなり
 偃蹇として青雲を尋ね
 隱淪として精魄を駐む
 道人は丹經を読み
 方士は玉液を練る
 朱霞は窓牖に入り
 曜靈は空隙を照らす
 傲睨して木芝を擗み
 波を凌いで水碧を采る
 眇然として万里に遊び
 掌を矯げて煙客を望む
 永えに安期の術を得なば

14 豈愁濛汜迫 豈に濛汜の迫るを愁えんや

〔押韻〕

○石・液・碧（入声二十二昔韻）
○魄・隙・客・迫（入声二十陌韻）

〔校正宋本広韻〕芸文印書館影印、一九六七年、に拠る）

〔校勘〕

01 崦山多靈草 底本の注に「今案音決、山為嶷」とあり、『文選音決』では「崦嶷多靈草」に作るという。

06 方士練玉液 「方士鍊玉液」（校勘各本）

07 朱霞入窓牖 底本の注に「今案鈔音決、霞為緞」とあり、『文選鈔』と『文選音決』では「朱緞入窓牖」に作るという。

09 傲睨擗木芝 「傲睨擗木芝」（校勘各本）

10 凌波采水碧 「凌波采水碧」（尤刻本・胡刻本・国子監本・秀州本）、「陵波采水碧」（陳八郎本・明州本・建州本）

本・秀州本）、「陵波采水碧」（陳八郎本・明州本・建州本）

〔訳〕

太陽の沈む果てにある崦嵫山には五色の芝が生い茂り、東海にある蓬萊はじめ三神山には珍しい石があふれているという。

私も高く青雲に懸かる山を探し求め、世を逃れてそこに自らの魂魄を落ち着かせる。

そこでは道人が仙書である丹經を読み、方士は長命の仙薬を錬っている。

夕焼けに染まる赤い雲気が窓から流れ込み、日の光が壁の隙間から照らす。

勝手気ままに辺りの靈芝を摘み、波を越えて水玉を集める。

はるか万里の彼方まで遊び、手を高くかかげて雲間をゆく仙人を眺める。

安期が行った長命の術を永久に続けることができれば、我が命が濛汜に沈みゆくことなど全く気にもならない。

鈔曰、郭景純好仙方、作遊仙詩十七首。在集中。今文通擬之。

璞字景純、河東人。性簡放不治威儀、而敏明朗有才思。

善属文、専心学業。好古文奇字、妙於陰陽算曆。有郭公者、璞從之受業。公以青囊中書九卷与之、由是遂洞天文卜筮之術。雖京房管輅不能過也。璞門人趙載嘗竊青囊書。未及誦而為火所焚。所

王敦聞其有術数、引為参軍。及敦起事、令璞筮之。璞曰、不能往。敦大怒、遂斬之往。果不成。璞雖逆辨吉凶、不能自知其死。

璞晋中興初、遊越城。行逢一人、以袴褶賜之。此人未敢受而問其故。璞曰、後当知。不須問。及後出市、此人果行刑焉。

雷居士豫章記云、吳猛与璞、以術数相善、同在王敦府。知敦将害璞、而問曰、卿命尽幾何。答曰、下官命尽中時。

又問、猛之為寿幾何。璞云、不可量也。既而害璞、又達収猛、々入壁中、忽然不見。仍於津渚附載遠南。猛自執政、使余人乘舟甚密、閉輪戸、舫主不解。所以久竊窺之、果見兩

【郭弘農（遊仙）璞】

龍夾舟而行山上。日未与而至宮停。故得免禍。

又云、上遼道西昔有石姥宮、有大蛇。長十丈、行者吸皆之、立而吞前後。不知所食之多少、而白骨為山矣。遼道是七郡桂州。行之要不可以絶。猛乃率弟子而往。蛇聞猛至、逃于穴中、氣勢囂赫、独難可犯。猛乃志鬼神相与制之。蛇出穴、頭高數丈、猛乃於後以脚躡之、弟子加斤斧焉。大蛇雖死、独有小蛇。長數丈得逸去。今已能銜人度江、人猶驚畏之。俗云、此蛇蜀地之精。故特盛也。

猛豫章建寧人。干慶為豫章建寧令、死已三日、猛曰、明府算曆未応尽。似是誤耳。今為參之。乃沐浴衣裳、復死於慶側。經一宿果相与俱生。慶云、見猛天曹中論訴之。慶即干宝之兄、宝因之作搜神記。故其序云、建武中、所有感起、是用發憤焉。今論此者、与者郭氏相須。故附見之。

陸善経曰、晋書云、璞卒後、贈弘農太守也。

鈔に曰わく、郭景純 仙方を好み、遊仙詩十七首を作る。集中に在り。今 文通之に擬す。

璞 字は景純、河東の人なり。性 簡放にして威儀を治めざるも、而るに敏にして明朗、才思有り。善く文を属し、

学業に専心す。古文奇字を好み、陰陽・算曆に妙たり。郭公なる者有り、璞之に従いて業を受く。公 青囊中書九卷を以て之に与え、是れに由りて遂に天文・卜筮の術を洞らかにす。京房・管輅と雖も過ぐる能わざるなり。璞が門人趙載 嘗て青囊書を竊む。未だ読むに及ばずして火の焚く所と為る。

王敦 其の術数有るを聞き、引きて参軍と為す。敦事を起こすに及び、璞をして之を筮せしむ。璞曰わく、往くと能わず、と。敦大いに怒り、遂に之を斬りて往く。果たして成らず。璞 逆め吉凶を弁ずと雖も、自ら其の死を知る能わず。

璞 晋の中興の初め、越城に遊ぶ。行くゆく一人に逢い、袴褶を以て之に賜う。此の人未だ敢えて受けずして其の故を問う。璞曰わく、後当に知るべし。問うを須いず、と。後に市に出ずるに及び、此の人果たして刑を行う。

雷居士の豫章記に云う、呉猛と璞と、術数を以て相い善し、共に王敦の府に在り。敦の将に璞を害せんとするを知り、而して問うて曰わく、卿が命幾何に尽くるか、と。答えて曰わく、下官が命 中時に尽きん、と。又た問う、猛の

寿為る幾何ぞ、と。璞云う、量るべからざるなり、と。既にして璞を害し、又た達して猛を収めんとするに、猛壁中に入り、忽然として見えず。仍つて津渚しんしよに於いて附載して遠く南せんとす。猛自ら政を執り、余人をして舟に乗らしむること甚だ密なり。輪戸を閉め、舫主解かず。所以ゆゑに久しく窃かに之を窺えば、果たして兩龍の舟を夾さしかさみて山上去くを見る。日未だ与かぞえずして宮停に至る。故に禍いを免るを得たり、と。

又た云う、上遼道の西 昔石姥宮有り。大蛇有り、長十丈、行く者皆な之に吸われ、立ちどころにして前後を呑む。食らう所の多少を知らずして、白骨山を為す。遼道は是れ七郡の桂州なり。行の要以て絶つべからず。猛乃ち弟子を率いて往く。蛇猛の至るを聞き、穴中に逃るるも、氣勢きうかく囂ごう赫かくにして、独り犯すべきこと難し。猛乃ち鬼神を志しるし、相いと之を制す。蛇穴より出づれば、頭高きこと数丈、猛乃ち後ろより脚を以て之を躡つかみ、弟子斤斧を加う。大蛇死すと雖も、独り小蛇有り。長数丈にして逸はしり去るを得たり。今已に能く人を銜くんで江を度り、人猶お之に驚畏す。俗に云う、此の蛇蜀地の精なり。故に特に盛んなるなり、と。

猛は豫章建寧の人なり。干慶 豫章の建寧令と為り、死して已に三日。猛曰わく、明府の算曆未だ応に尽くべからず。是れ誤るに似たるのみ。今為に之に参ず、と。乃ち衣裳を沐浴し、復た慶の側に死す。一宿を経て果たして相ともいと俱ともに生く。慶云う、猛が天曹中に之を論訴するを見る、と。慶は即ち干宝の兄、宝之に因りて搜神記を作る。故に其の序に云う、建武中、感起する所有り、是を用て憤りを發す、と。今此を論ずる者、郭氏と相ともいと須もとむ。故に附して之を見あらわす。

陸善経曰はく、晋書に云う、璞卒して後、弘農太守を贈らるるなり、と。

〔校勘〕

○郭弘農(遊仙) 璞 底本、李善注「善曰、臧栄緒晋書曰、璞卒後、贈弘農太守」が無い。

○所 見せ消ちによつて衍字と見なす。

○吸皆 転倒符によつて「皆吸」と見なす。

○為為 衍字。

○三 底本、虫損により「二」に作るが、この記事を載

せる『搜神記』等の資料に基づき「三」に作る。

○所有 転倒符によって「有所」と見なす。

○者 見せ消ちによって衍字と見なす。

〔訳〕

『文選鈔』にいう、郭景純は仙術を好み、「遊仙詩十七首」を作った。その詩は郭景純の別集中に存する。いま江文通はその詩に擬えたのである。

郭璞は字を景純といい、河東（現在の山西省）の出身である。生まれつきこせこせしない自由奔放な性格で、礼儀などには無頓着であったが、明るく大らかで才知にあふれていた。文章を作るのに長じ、ひたすら学問に専念した。また古文や変わった文字を書くのを好み、陰陽・暦法にたいへん詳しくかった。郭公という者がおり、璞は彼から教えを受けた。公は『青囊中書』九巻を璞に授けた。これによって璞は天文や卜筮の術に精通したのである。それはかの京房や管輅であっても、璞を凌ぐことはできないほどであった。璞の門人である趙載が『青囊書』を盗んだことがあった。しかしまだ読み終わらないうちに焼失してしまっ

た。

王敦は璞の術数の名声を聞き、彼を起用して記室参軍とした。やがて敦が謀叛を起こす際に、璞がこれについて占筮を行った。そして璞は次のようにいった、「行ってはなりません」と。すると敦は激怒し、そのまま璞を斬り殺して行ってしまった。しかし彼が予期したとおり反乱は成功しなかった。璞は前もって吉凶を判断することはできたが、自らの死を知り得ることはできなかったのである。

璞は晋の中興年間の初め、越の街に旅した。道すがらある人に出会い、馬乗り袴を授けた。その人は受け取ろうとせず、その理由を璞に尋ねた。璞はいった、「後日その理由が必ず分かるはずだ。尋ねるまでもない」と。後日市街に赴くと、果たしてこの人物が璞の処刑を執行することになった。

雷居士の『豫章記』にいう、「呉猛と璞は、卜筮や陰陽の術を行う仲間として親交があり、ともに王敦の屋敷にいた。そこで猛は敦が璞を殺害しようとしていることを知り、璞に尋ねた、『君の命は何時尽きるのか』と。璞は答えた、『私の命はあと半時ほどで尽きるだろう』と。猛はさらに尋ね

た、『それでは私の寿命はあとどれくらいだろうか』と。璞はいった、『それはとても量ることができない』と。やがて敦は璞を殺し、さらに猛を捕らえようとやって来たが、猛は壁の中に入って、たちまち姿が見えなくなった。そして船着き場から船に乗って遠く南に向かおうとした。猛はみづから一切をとり仕切り、他の人々を船いっばいに乗せた。丸い戸口を閉め、船主はそれを解放しなかつたので、久しく隙間から外のようなすを伺っていると、はたして二匹の龍が船を間にはさんでともに山上へ向かって行くのが見えた。いまだ日を経ずして宮停までたどり着き、それゆえに難を逃れることができたのであった」と。

同じく『豫章記』にいう、「上遼道の西に、むかし石姥宮があり、そこには大蛇が棲んでいた。その身の丈は十丈ほどで、道行く人はみなこの大蛇に吸われ、たちどころに上から下まで呑みこまれてしまった。その食らった人は数え切れず、それは白骨で山ができるほどであった。遼道は七郡の桂州にあり、ここは交通の要所で決して絶つことほできない場所であった。そこで猛は弟子を率いて蛇の退治に向かった。蛇は猛がやって来たのを聞きつけると、穴の中

に隠れたが、その氣勢は轟くように激しく盛んであり、猛ひとりではとても退治が困難であった。そこで猛は鬼神を使役し、一緒に大蛇を制することにした。蛇は穴より頭を数丈ほど出したところ、猛はそこで後ろから大蛇を足で踏みつけ、そこを弟子たちが斧を振るって斬りつけたのであった。大蛇は息絶えたが、わずかに小蛇が生き残っていた。その身の丈は数丈ほどであったために猛から逃れることができたのであった。その蛇は今も人々を呑み込みんで長江を渡っているといい、そのため人々はなおもこの蛇に恐怖したのである。これについて民間では、『この蛇は蜀の地の精霊であり、そのためとくに氣勢が盛んなのである』といわれている」と。

呉猛は豫章建寧の出身である。干慶が豫章の建寧令であったとき、彼は在任中に亡くなり、すでに三日を経過していた。そこで猛は次のようにいった、「長官の明府での算暦はいまだ尽きてはおりません。これはきつと何かの誤りでしょう。いまそのためにここに参上した次第です」と。そこで衣裳を沐浴し、さらに慶の側で死んだ。一夜を経て、果たして二人はともに生き返った。干慶はいう、「猛が天曹

の中で私の寿命について訴えているのを見た」と。干慶は干宝の兄であり、干宝はこの出来事に因んで『搜神記』を著した。それゆえにその序には次のようにいう、「建武中（三一七〜三一八）、私は（兄干慶の不思議な出来事によって）感動し、そのためこうして心を奮い起こして筆を執った次第である」と。いま遊仙を論ずる者は、郭氏とともに呉猛の事を併せて求める。ゆえにこうしてその伝を附して示したのである。

陸善経はいう、『晋書』には、「璞が亡くなった後、弘農太守を追贈された」とある、と。

〔注〕

①遊仙詩十七首　いま、郭璞の「遊仙詩」は十四首を存する。そのうち『文選』巻二十一には七首を収める。別集については『隋書』巻三十五「経籍四」に、「晋弘農太守郭璞集十七卷」として著録されているが現在では散佚しており、明、張溥『漢魏六朝百三名家集』巻五十六、五十七に『郭弘農集』二巻が輯佚されている。

②青囊中書九卷　未詳。『隋志』には著録されていない。

ただ、南宋、晁公武撰『郡齋讀書後志』巻二（衢州本では巻十四）「五行類」に、「郭璞撰」として「青囊補注三巻」を著録するが、その解題によれば『葬書』に類するものであり、これは郭璞の名に仮託した偽書であると考えられている。

③京房　前七七〜前三七。前漢の学者。字は君明。東郡頓丘（現在の河北省）の人。もとは李姓であったが、のち自ら京氏に改めた。梁の焦延寿を師として易を学び、とりわけ災異説に長じたといわれる。初元四年（前四五）に孝廉に挙げられて郎中となり、のち元帝の時に博士となった。この間、羌族の反乱や日食などを予言して的中させ、元帝に高く評価された。しかし、しばしば上疏して時の政治の得失をも論じたため、当時権勢を誇っていた中書令石顯らに疎まれて魏郡太守に左遷され、まもなく捕らえられて獄死した。著に『京房易伝』三巻がある。伝は『漢書』巻七十五に立てられている。

④管輅　二〇九〜二五六。三国時代の易者。平原（山東省）の人。幼きより天文を好み、長じて『周易』に通じ、とりわけ卜筮にすぐれていた。官は少府丞に至る。伝は『三

『国志』卷二十九「方技伝」に立てられている。

⑤王敦 二六六〜三二四。晋の軍人、政治家。字は処仲。琅邪臨沂（山東省）の人。宰相の王導は従兄であり、妻は武帝司馬炎の娘。琅邪王司馬睿（後の元帝）が永嘉の乱を避けて南渡した際には、王導とともに補佐して朝廷再建に尽力した。その功績を認められ、朝廷において大いに権勢を振ったが、やがて元帝とその側近らと対立することとなる。そして、永昌元年（三二二）には、元帝の側近であった劉隗りゅうゐと刁協ちようきやうらの誅殺を理由に武昌で挙兵し、建康を制圧して丞相を僭称した。明帝が即位すると、その専横を弾劾されて王敦討伐の勅令が下ったため、太寧二年（三二四）に再び反乱を起こしたが、同年戦乱の最中病死した。『晋書』卷九十八に伝が立てられている。

⑥雷居士 三八六〜四四八。名は次宗、字は仲論。豫章南昌（現在の江西省南昌市）の人。幼くして廬山に入って慧遠に師事した。志高く学問に励み、とりわけ三礼と『毛詩』に精通した。やがて東林寺の東に館を建て、東林十八賢の一人に数えられた。元嘉十五年（四三八）には、宋の文帝に召されて都建康に行き、鷄籠山で生徒百人を集めて

教授した。その功が認められて給事中に任命されたが、これを辞して廬山に戻って隠遁の身となった。のち元嘉二十五年、再び召されて鍾山の西巖のふもとに招隠館を築き、そこで皇太子や諸王に『喪服経』などを講義した。同年、病を得て鍾山で没した。著として伝えられるものに『五經要義』五卷、『略注喪服経伝』一卷、『毛詩序義』二卷、『雷次宗集』十六卷（以上『隋志』に拠る）などがあるが、いずれも散佚している。伝は『宋書』卷九十三「隱逸伝」、および『南史』卷七十五「隱逸伝」に立てられている。

⑦豫章記 地理書。豫章の寺院、祠、墓、山などに関する事柄について記したものの。『隋書』卷三十三「経籍四」および『新唐書』卷五十八「芸文志」に、雷次宗撰「豫章記一卷」、また『通志』卷六十六「芸文略四」には、雷次宗撰として「豫章記一卷」と「豫章記三卷」の二種を著録しているが、現在では散佚している。そのうちの教条は『説郛』卷六十七上に、「豫章古今記「雷次宗」として輯佚されているが、この『文選鈔』に引く記事については未収。

⑧吳猛 生卒年未詳。字は世雲、豫章武寧県の人。伝は『晋書』卷九十五「芸術」に立てられている。本伝および

『太平広記』卷十四「吳真君」に引く『十二真君伝』などによれば、幼き頃より孝行で知られ、八歳の時、家が貧しく部屋に掛ける蚊帳が無く、それを案じた吳猛は両親の代わりに蚊に刺されたという逸話が収められており、そのことから二十四孝の一人に数えられている。また『搜神記』卷一には干宝の兄である干慶を蘇生させた話が収められている。

⑨ 兩龍夾舟而行山上 「兩龍夾舟」という表現は、『呂氏春秋』知分篇に、「荆有次非者。得宝劍于干遂、還反涉江、至於中流、有兩蛟夾繞其舟。（荆に次非なる者有り。宝劍を干遂に得、還反らんとして江を涉り、中流に至るや、兩蛟有りて夾みて其の舟を繞る）」とよく似たものがみえており、また『淮南子』道応篇と汜論篇にも『呂氏春秋』に基づく説話を載せる。

⑩ 又云……故特盛也 以下の吳猛が弟子とともに大蛇を退治した説話については、『雲笈七籤』卷一百六「吳猛真人伝」につきのようにみえている。

吳猛字世雲、豫章人也。……海昏上僚路有大蛇。時或斷道、以氣吸吞行人、行旅為絶。猛与弟子往除蛇害、蛇乃

入藏深穴。猛救南昌社公追蛇。蛇頭高数丈、猛踏蛇尾、沿背而以足按頭、弟子斫殺之。猛云、此蛇是蜀精、蛇死則杜毅（『太平広記』は攷に作る）滅矣。果如言。

（吳猛 字は世雲、豫章の人なり。……海昏上僚の路に大蛇有り。時に或いは道を斷ち、氣を以て行人を吸吞し、行旅絶為り。猛と弟子と往きて蛇の害を除かんとするに、蛇乃ち深穴に入藏す。猛 南昌社公を勅して蛇を追わしむ。蛇の頭高きこと数丈にして、猛 蛇の尾を踏み、背に沿うて足を以て頭を按え、弟子之を斫り殺す。猛云う、此の蛇は是れ蜀の精にして、蛇死すれば則ち杜毅滅ぶ、と。果たして言の如し）

また『太平広記』卷四百五十六「吳猛」にも「出豫章記」として、これをさらに短くしたほぼ同様の説話が収められている。なお、内容は異なるが『酉陽雜俎』卷二「玉格」にも以下のごとく吳猛が弟子の許旌陽とともに蛇を退治した話が見える。

晋許旌陽、吳猛弟子也。當時江東多蛇禍、猛將除之、選徒百余人。至高安、令具炭百斤、乃度尺而斷之、置諸壇上。一夕、悉化為玉女、惑其徒。至曉、吳猛悉命弟子、

無不涅其衣者、唯許君独無。乃与許至遼江。及遇巨蛇、吳年衰、力不能制。許遂禹步勅劍、登其首斬之。

(晋)の許旌陽は、吳猛の弟子なり。当時江東に蛇の禍い多く、猛將に之を除かんとし、徒百余人を選ぶ。高安に至り、炭百斤を具えしめ、乃ち尺を度りて之を断ち、諸を壇上に置く。一夕にして、悉く化して玉女と為り、其の徒を惑わす。曉に至りて、吳猛悉く弟子に命ずるに、其の衣を涅まざる者無く、唯だ許君のみ独り無し。乃ち許と遼江に至る。巨蛇に遇うに及び、吳年衰え、力もて制する能わず。許遂に禹歩して勅劍し、其の首に登りて之を斬る)

①猛豫章建寧人……見猛天曹中論訴之 この逸話は多くの志怪小説に散見している。たとえば、やや長いものとしては以下に掲げる『幽明録』の記事がある。

晋有干慶者。無疾而終。時有術士吳猛、語慶之子曰、干侯算未窮、方為請命、未可殯殮。尸臥静舍、惟心下稍暖。居七日、時盛暑、慶形体向壞。猛凌晨至、教令属纊候氣、為作水、令以洗、并飲漱。如此便退。日中許、慶蘇焉。旋遂張目開口、尚未發聲。闔門皆悲喜。猛又令以水

含灑、遂起、吐腐血数升、稍能言語。三日平復如常。説、初見十数人来、執縛桎梏到獄。同輩十余人、以次語對。次未至、俄見吳君、北面陳釈断之。王遂勅、脱械令歸。所經官府、莫不迎接請謁吳君。而吳君皆与之抗礼。即不知悉何神也。(魯迅輯『古小説鈎沈』に拠る)

(晋)に干慶なる者有り。疾無くして終わる。時に術士吳猛有り、慶の子に語りて曰わく、干侯の算未だ窮まらず、方に為に命を請わん、未だ殯殮すべからず、と。尸静舍に臥し、惟だ心下稍や暖かなり。居ること七日、時に盛暑なれば、慶の形体壞るるに向かう。猛凌晨に至り、教えて纊を属けて氣の續くを候わしめ、為に水を作り、以て洗い、並びに飲漱せしむ。此くの如くにして便ち退く。日中許にして、慶蘇る。旋で遂に目を張り口を開くも、尚お未だ声を發せず。門を闔ちて皆な悲喜す。猛又た水を以て含み灑がしむるに、遂に起ち、腐血数升を吐き、稍やく言語を能くす。三日にして平復すること常の如し。説く、初め十数人の來たるを見、執縛桎梏せられて獄に到る。同輩十余人、次を以て語對す。次未だ至らずして、俄かに吳君の、北面して之を釈し断ぜんことを陳ぶるを

見る。王遂に勅し、械を脱し帰らしむ。経る所の官府、迎接して呉君に謁せんことを請わざるは莫し。而して呉君皆な之れと抗礼す。即ち悉くは何れの神なるかを知らざるなり)

以上の話は若干の文字の異同はあるが、同じく『太平広記』卷三百七十八「干慶」にも収められている。また『搜神記』卷一には以下のごとくみえる。

呉猛、濮陽人。仕呉為西安令、因家分寧。……西安令干慶、死已三日。猛曰、数未尽、当訴之于天。遂臥屍旁。数日与令俱起。

(呉猛は、濮陽の人なり。呉に仕えて西安の令と為り、因りて分寧に家す。……西安の令干慶、死して已に三日。猛曰わく、数未だ尽きざれば、当に之を天に訴うべし、と。遂に屍の旁に臥す。数日にして令と俱に起く)

このほか『搜神後記』卷四、『太平広記』卷十四に引く「呉真君」などにも同様の説話が収められている。しかし、いづれも集注が引く『豫章記』がいうように、干慶が干宝の兄であることについては示されていない。また『晋書』卷八十二「干宝伝」にも、

又宝兄嘗病氣絶、積日不冷。後遂悟云、見天地間鬼神事。如夢覚、不自知死。

(又た宝の兄嘗て病みて氣絶し、積日冷やかならず。後遂に悟めて云う、天地の間の鬼神の事を見たり。夢の覚むるが如くにして、自ら死せるを知らず、と)

との記載があるが、やはり干慶との関係については明言されていない。

⑫宝因之作搜神記 『晋書』干宝伝にはつぎのように入

性好陰陽術数、留思京房・夏侯勝等伝。宝父先有所寵侍婢。母甚妬忌。及父亡、母乃生推婢於墓中。宝兄弟年少、不之審也。後十余年、母喪開墓、而婢伏棺如生。載還、經日乃蘇。言、其父常取飲食与之、恩情如生。在家中吉凶、輒語之、考校悉驗。地中亦不覺為惡。既而嫁之、生子。又宝兄嘗病氣絶、積日不冷。後遂悟云、見天地間鬼神事。如夢覚、不自知死。宝以此遂撰集古今神祇靈異、人物变化、名為搜神記。凡三十卷。

(性陰陽術数を好み、思いを京房・夏侯勝等の伝に留む。宝の父先に寵する所の侍婢有り。母甚だ妬忌す。父の亡

するに及び、母乃ち生まれながらにして婢を墓中に推す。宝の兄弟年少にして、之を審びらかにせざるなり。後十余年、母の喪に墓を開くに、婢の棺に伏すること生くるが如し。載せ還りて、日を経て乃ち蘇る。言う、其の父常に飲食を取りて之に与え、恩情生くるが如し、と。家中に在りし吉凶、輒ち之を語り、考校するに悉く驗あり。地中も亦た悪しと為すを覚え。既にして之を嫁がしめ、子を生む。又た宝の兄嘗て病みて氣絶し、積日冷やかならず。後遂に悟めて云う、天地の間の鬼神の事を見たり。夢の覚むるが如くにして、自ら死せるを知らず、と。宝此を以て遂に古今の神祇の靈異、人物の變化を撰集し、名づけて搜神記と為す。凡て三十卷なり)

⑬故其序云……是用發憤焉 この一文、現行の『搜神記』にはみえない。恐らくは原本『搜神記』序にはあったものと考えられる。なお、

⑭晋書云……贈弘農太守也 ここでいう『晋書』とは、集注本以外の題下に附されている李善注に、「善曰、臧榮緒晋書曰、璞卒後、贈弘農太守。」とあることから、臧榮緒の『晋書』をさしている。清、湯球『九家旧晋書輯本』(卷十

四「郭璞」には、「敦平後、贈弘農太守。(敦平らげられし後、弘農太守を贈らる)」と輯佚されている。また現行の『晋書』郭璞伝にも「及王敦平、追贈弘農太守。(王敦平らげらるるに及び、弘農太守を追贈せらる)」との記事がみえてい

01 02 【崦山多靈草 海浜饒奇石】

李善曰、郭璞遊仙詩曰、円丘有奇草、鍾山出靈液。楚辞曰、吾令羲和弭節兮、望崦嵫而勿迫。王逸曰、崦嵫山也。海浜、即海中三山也。

鈔曰、崦嵫山、日没处、其上多生五芝草、服之得神仙。浜、水涯也。方丈蓬萊之上有仙隱处。安期在上、採奇石八珍五石之流。

音決、崦、於敵反。嵫、音茲。浜、音賓。饒、而遥反。劉良曰、靈草、芝也。奇石、可食而仙者。謂安期練五石是也。

今案音決、山為崦。

李善曰わく、郭璞の遊仙詩に曰わく、円丘には奇草有り、鍾山には靈液出づ、と。楚辞に曰わく、吾れ羲和をして節を弭め、崦嵫を望みて迫ること勿からしむ、と。王逸曰わく、崦嵫は、山なり。海浜は、即ち海中の三山なり、と。鈔に曰わく、崦嵫山は、日の没する処にして、其の上には多く五芝草を生じ、之を服すれば神仙となるを得。浜は、水涯なり。方丈・蓬萊の上に仙の隠処有り。安期上に在りて、奇石・八珍・五石の流を採る、と。

音決に、崦は、於巖の反。嵫は、音茲。浜は、音賓。饒は、而遥の反、と。

劉良曰わく、靈草は、芝なり。奇石は、食いて仙者となるべし。安期五石を練ると謂うは是れなり、と。

今音決を案ずるに、山を崦と為す。

〔校勘〕

○李善曰 該当箇所無し（尤刻本・胡刻本・国子監本）、
「善曰」〈明州本・秀州本・建州本〉以下、同様のため校勘を略す。

○楚辞曰 「楚詞曰」〈尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本・建州本〉

○劉良曰 「良曰」〈陳八郎本・明州本・秀州本・建州本〉

○芝也 「芝草也」〈陳八郎本・明州本・秀州本・建州本〉

○奇石 「浜涯也奇石可食」〈陳八郎本・明州本・秀州本・建州本〉

○而仙者 「而仙」〈陳八郎本・明州本・秀州本・建州本〉

○練五石 「鍊五色石」〈陳八郎本・明州本・秀州本・建州本〉

〔訳〕

李善はいう、郭璞の「遊仙詩」には、「円丘には珍しい草木が生えており、鍾山には靈妙な水が湧き出ている」という。「楚辞」には、「私は日の御者である羲和に命じて車の速度をゆるませ、日の沈む崦嵫山に近づけさせないようにした」という。これについて王逸は、「崦嵫は、山である」という。海浜は、つまり海中にある三山のことである、と。

『文選鈔』にいう、崦嵫山は、日が沈むところであり、その頂きには五色の芝がたくさん生い茂り、これを服用す

れば神仙となることができるのである。浜は、水涯である。方丈や蓬萊の水辺には仙人の隠れ家がある。安期はその水辺にあつて、奇石や八珍、五石といった類を採集したのである、と。

『文選音決』にいう、崦は、於巖の反。嶷は、音は茲。浜は、音は賓。饒は、而遙の反、と。

劉良はいう、靈草は、芝のことである。奇石は、これを食べることで仙人となることのできるものである。(郭璞の「遊仙詩」にある)「安期が五色の石を練る」というのはまさにこのことである、と。

いま『文選音決』を調べてみると、本文の「山」を「嶷」に作っている。

〔注〕

①郭璞遊仙詩曰……鍾山出靈液 郭璞「遊仙詩」其七(『文選』卷二十一)に、「円丘有奇草、鍾山出靈液。王孫列八珍、安期鍊五石。(円丘に奇草有り、鍾山靈液出づ。王孫は八珍を列ね、安期は五石を鍊る)」とある。なお以下の諸注で述べる八珍、五石、安期についても本詩にみえている。

②楚辞曰……崦嵫而勿迫 『楚辞』離騷に、「吾令羲和弭節兮、望崦嵫而勿迫。路曼曼其脩遠兮、吾将上下而求索。(吾れ羲和をして節を弭め、崦嵫を望んで迫ること勿からしむ。路曼曼として其れ脩遠なり、吾れ將に上下して求索せんとす)」とみえる。その王逸注に、「崦嵫、日所入山也。下有蒙水、水中有虞淵。迫、附也。言我恐日暮年老、道德不施、欲令日御按節徐行、望日所入之山、且勿附近、冀及盛時遇賢君也。勿、一作未。(崦嵫は、日の入る所の山なり。下に蒙水有り、水中に虞淵有り。迫は、附づくなり。言うころは我れ日暮れ年老い、道德施かれざらんことを恐れ、日御をして按節徐行せしめ、日の入る所の山を望み、且らく附近すること勿からんと欲して、盛時に及んで賢君に遇わんことを冀うなり。勿は、一に未に作る)」とあり、ここでは「日所入」の三字を存する。なお「崦嵫」について、洪興祖は「崦、音淹。嵫、音茲。山海経曰、鳥鼠同穴山西南曰崦嵫。又云、西曰嵫之山。淮南子云、日入崦嵫、経細柳、入虞淵之汜。(崦、音は淹。嵫、音は茲。山海経(西山経)に曰わく、鳥鼠同穴山の西南を崦嵫と曰ふ、と。又た云う、西を嵫の山と曰う、と。淮南子(天文訓)に云う、日は崦

巖に入り、細柳を経、虞淵の汜に入る、と」と注する。

③三山 仙人が住むという三神山。蓬萊、方丈、瀛洲をさす。『史記』卷二十八「封禪書」に、「八神、一曰天主、祠天齊。……四曰陰主、祠三山。（八神、一に曰わく天主、天齊を祠る。……四に曰わく陰主、三山に祠る）」とあり、その『史記素隱』には顔師古の注を引いて、「小顔以為、下所謂三神山。（小顔以為へらく、下に謂う所の三神山なり、と）」という。これについて同じく「封禪書」に、「自威宣燕昭、使人入海、求蓬萊方丈瀛洲。此三神山者、其伝在勃海中、去人不遠。（威・宣・燕・昭自り、人をして海に入り、蓬萊・方丈・瀛洲を求めしむ。此の三神山は、其の伝勃海中に在り、人を去ること遠からず）」とある。

④安期 安期生（生卒年未詳）。秦漢の頃の方士。琅琊の人。学を河上丈人に受けたという。人々からは長寿を得たことにより「千歳翁」と称せられ、また「安丘先生」と呼ばれた。『列仙伝』卷上「安期先生」に拠れば、始皇帝が東に巡幸した時に出会い、三日三晩語り合ひ、金玉数千万を賜ったが受けなかった。その返礼にと赤玉の靴を送り、「数年の後、我を蓬萊山下に求めよ」との手紙を残して去った。

始皇帝は徐福をはじめ道士たちを派遣して船を出して搜索したが、遂に蓬萊山にたどり着くことはできなかった。そのため、阜郷の海辺數十ヶ所に祠がたてられたという。伝は皇甫謐『高士伝』巻中にも立てられている。また『史記』「封禪書」にもその名がみえる。

⑤八珍 古代の八種の珍味。また、八種の調理法による食物をいう。『三国志』魏志「衛顛伝」に、「礼、天子之器必有金玉之飾、飲食之肴必有八珍之味。（礼は、天子の器には必ず金玉の飾り有り、飲食の肴には必ず八珍の味有り）」とある。これについて『周礼』天官「膳夫」には、「凡王之饋食用六穀、膳用六牲、飲用六清、羞用百二十品、珍用八物。（凡そ王の饋食には六穀を用い、膳には六牲を用い、飲には六清を用い、羞には百二十品を用い、珍には八物を用う）」とあり、鄭玄は「珍、謂淳熬・淳母・炮豚・炮牂・擣珍・漬熬・肝膋也。（珍は、淳熬・淳母・炮豚・炮牂・擣珍・漬熬・肝膋を謂うなり）」と注する。

⑥五石 道士が不老長生の薬の原料として用いた薬石の総称。『抱朴子』内篇「金丹」に、「五石者、丹砂・雄黄・白礬・曾青・慈石也。（五石とは、丹砂・雄黄・白礬・曾青

・慈石なり」という。

03 04 【偃蹇尋青雲 隱淪駐精魄】

李善曰、江賦^①曰、納隱淪之列真、挺異人乎精魄。抱朴子曰、人無賢愚、皆知身之有魂魄。分去則人病、尽去則人死也。

鈔曰、偃蹇、高聳之貌。尋青雲、言高至天。璞當時為預知死、故作詩以自解。駐、謂定壽。

音決、蹇、居輦反。駐、竹樹反。魄、音白。

呂向曰、偃蹇、緣高貌。隱淪、謂絕迹也。駐、留也。精魄、魂也。

陸善経曰、偃蹇、猶天矯昇仙之状。十州記云、滄浪海島上有大山、積石室多。石腦石桂^{石英}石膽之属百余種、皆生於嶋。服之神仙長生也。

李善曰わく、江の賦に曰わく、隱淪の列真を納れ、異人を精魄に挺んづ、と。抱朴子に曰わく、人に賢愚無く、皆

な身の魂魄有るを知る。分かれ去れば則ち人病み、尽く去れば則ち人死するなり、と。

鈔に曰わく、偃蹇は、高く聳ゆる貌。青雲を尋ぬは、高くして天に至るを言う。璞は当時預め死を知るが為の故に詩を作りて以て自解す。駐は、寿を定むるを謂う。

音決に、蹇は、居輦^{キョレン}の反。駐は、竹樹の反。魄は、音白、と。

呂向曰わく、偃蹇は、高きに縁る貌。隱淪は、迹を絶つるを謂うなり。駐は、留むるなり。精魄は、魂魄なり、と。

陸善経曰わく、偃蹇は、猶お天矯として昇仙する状のごときなり。十州記に云う、滄浪海の島上に大山有り、積石の室多し。石腦・石桂・石英・石膽の属^{たくい}百余種、皆な嶋に生ず。之を服すれば神仙のごとく長生するなり、と。

「校勘」

○呂向曰 「向日」(陳八郎本・明州本・秀州本・建州本)

○精魄魂魄 「精魄」(陳八郎本)

○魂魄也 下句「不去其身則不死」(陳八郎本・明州本・秀州本・建州本)

〔訳〕

李善はいう、郭璞の「江賦」に、「世を隠れた多くの神仙を引き入れて、すぐれた人物の魂魄を輩出する」とある。また『抱朴子』には、「人間には賢愚は無く、みなわが身に魂魄があることを知っている。その魂魄が分離すれば人は病気になる、すべて飛び去ってしまえば人は死ぬのである」という、と。

『文選鈔』にいう、偃蹇とは、高く聳えるさまをいう。青雲を尋ねるといふのは、高く天にまで届くことをいう。郭璞は当時すでに自身の死を予知していた。だから詩を作つて自ら弁解しようとしたのである。駐は、寿命を定めることをいう、と。

『文選音決』にいう、蹇は、居輦の反。駐は、竹樹の反。魄は、音は白、と。

呂向はいう、偃蹇は、高いところによじのぼっていくさまをいう。隠淪は、世俗から姿を隠すことをいう。駐は、留まることである。精魄は、魂魄のことである、と。

陸善経はいう、偃蹇は、ちようどのびのびと身が自由に

なつて昇仙するさまのことをいうのと同じである。『十州記』には、「滄浪海の島には大きな山があり、そこには石を積み重ねた部屋がたくさんある。それらは石腦・石桂・石英・石膽といった仙石の類い百余種が、いずれも島で自生している。これらを服用すれば神仙のように長生を得ることができる」とある、と。

〔注〕

①江賦曰……挺異人乎精魄 郭璞「江賦」(『文選』卷十二)に、「納隱淪之列真、挺異人乎精魄。播靈潤於千里、越岱宗之触石。(隱淪の列真を納れ、異人を精魄に挺んづ。靈潤を千里に播くこと、岱宗の石に触るるに越ゆ)」とある。「隱淪」は、世俗を避けて暮らすこと。隱遁することをいう。李善は、後漢の桓譚の『桓子新論』を引いて、「天下神人五、一曰神仙、二曰隱淪、三曰使鬼物、四曰先知、五曰鑄凝。(天下の神人は五、一に曰わく神仙、二に曰わく隱淪、三に曰わく使鬼物、四に曰わく先知、五に曰わく鑄凝)」と注する。ここでは神人の五つの種類を示している。また、謝玄暉「敬亭山」(『文選』卷二十七)に、「隱淪既已託、靈

異俱然棲。(隠淪既已に託き、靈異俱然として棲めり)とみえる。「列真」は、列仙の意。李善は、後漢の馮衍の「爵銘」を引いて「富如江海、寿配列真。(富は江海の如く、寿は列真に配す)」といい、さらに『説文』を引いて「真、仙人変形也。(真は、仙人の変形なり)」と注する。また、左思「魏都賦」(『文選』卷六)にも、「常山平干、鉅鹿河間。列真非一、往往出焉。(常山・平干、鉅鹿・河間。列真一に非ず、往往にして出づ)」とみえる。

②抱朴子曰……則人死 『抱朴子』内篇「論仙」に、人無賢愚、皆知己身之有魂魄。魂魄分去則人病、尽去則人死。故分去則術家有拘録之法、尽去則礼典有招呼之義。此之為物至近者也。然与人俱生、至乎終身、莫或有自聞見之者也。豈可遂以不聞見之、又云無之乎。

(人に賢愚無く、皆な己が身の魂魄有るを知る。魂魄分かれ去れば則ち人病み、尽く去れば則ち人死す。故に分かれ去れば則ち術家に拘録の法有り、尽く去れば則ち礼典 招呼の義有り。此を之れ物至つて近き者と為すなり。然れども人と俱に生き、身を終うるに至りて、或いは自ら之を聞見する者莫きなり。豈に遂に之を聞見せざるを

以て、又た之れ無しと云うべけんや)とある。

③十州記云 『十州記』は『海内十洲記』のこと。一卷。後人が東方朔に偽託したもの。この引用は「滄海島」の条に、

滄海島在北海中。地方三千里、去岸二十一万里。海四面繞島、各広五千里。水皆蒼色、仙人謂之滄海也。島上俱是大山、積石至多。石象八石、石腦石桂英流丹黄子石膽之輩百余種、皆生於島。石服之神仙長生。島中有紫石宮室。

九老仙都所治、仙官数万人居焉。(「四部叢刊」子部所収『雲笈七籤』卷之二十六「十洲三島」に拠る)

(滄海島は北海中に在り。地方三千里、岸を去ること二十一万里。海の四面は島を繞り、各おの広さ五千里。水は皆な蒼色にして、仙人之を滄海と謂うなり。島の上には俱に是れ大山あり、積石至つて多し。石象・八石・石腦・石桂英・流丹・黄子・石膽の輩百余種、皆な島に生ず。石之を服すれば神仙のごとく長生す。島中に紫石の宮室有り。九老仙の都な治むる所にして、仙官数万人焉に居す)

とみえる。なお本文の引用では「積石室多」とあるが、『十州記』の諸本ではいずれも「積石至多（積石至つて多し）」に作る。それならば「あたりには積み重なった石がとても多く転がっている」という意味となろう。

05 06 【道人読丹經 方士練玉液】

李善曰、道人、方術之士也。已見述哀詩。神仙伝曰、淮南王好道術之士。於是八公乃往、遂授以丹經。漢書曰、燕齊之方士。傅玄求仙篇曰、玉液涌出華泉。楚辞曰、吮玉液兮止渴。

鈔曰、道人、謂得道之人。丹經、赤心也。作此經術、並練玉石法、皆取石心。故言丹經。淮南王八公丹經一卷。陶隱居仙方丹經三卷。又淮南集中鴻宝書。練丹為黄金、黄金成以為器、則神仙可見、蓬萊可遊。又抱朴子内篇、有神丹九転之法。致長生、其經不復備舉。又云、以朱草汁漬玉、則可使消以為水。飲之不死。朱草出瑞函。方士、有方術之士。練取玉汁和藥草、煮之為液。服之得長生。漢武帝故事、

西王母太上之藥、有金漿玉津也。

音決、液、音亦。

張銑曰、玉液、謂玉膏也。

李善曰わく、道人は、方術の士なり。已に述哀詩に見ゆ。神仙伝に曰わく、淮南王道術の士を好む。是に於いて八公乃ち往き、遂に授くるに丹經を以てす。漢書に曰わく、燕齊の方士、と。傅玄の求仙篇に曰わく、玉液華泉より涌き出づ、と。楚辞に曰わく、玉液を吮すつて渴かわきを止む、と。

鈔に曰わく、道人は、道を得たるの人を謂う。丹經は、赤心なり。此の經の術、並びに玉石を練る法を作すは、皆な石心を取るなり。故に丹經と言う。淮南王・八公の丹經一卷、陶隱居の仙方丹經三卷あり。又淮南集中に鴻宝なる書あり。練丹して黄金を為り、黄金成りて以て器を為せば、則ち神仙見るべし、蓬萊遊ぶべし。又抱朴子の内篇に神丹九転の法有り。長生を致すも、其の經復た備さに挙げず。又た云う、朱草の汁を以て玉を漬せば、則ち消えて以て水と為さしむべし。之を飲めば死せず、と。朱草は瑞函に出づ。方士は、方術有るの士なり。練りて玉汁を取り

て薬草に和し、之を煮て液と為す。之を服すれば長生を得たり。漢武帝故事に、西王母の太上の薬に、金漿・玉津有るなり、と。

音決に、液は、音亦、と。

張銑曰はく、玉液は、玉膏を謂うなり、と。

〔校勘〕

○已見述哀詩 「已見擬潘黃門述哀詩」(尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本・秀州本)、(建州本)はこの注を欠き、下句に「列異伝曰、北海宮陵有道人能使人与死人相見。同郡人、婦死已数年。聞而往見之曰、願令我一見死人、不恨。遂教其見之。於是与婦人相見、言語悲喜、恩情如生。良久乃聞鼓声。恨恨不能出戸、掩門乃走、其裾為戸所閉、掣絶而去後。歳余此人死。家葬之開見婦棺蓋、下有衣裾。」と注する。これは雜体詩「述哀詩」の「我慙北海術」の句の李善注に引かれているものである。

○楚辞曰 「楚詞曰」(尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本・建州本)

○張銑曰 「銑曰」(陳八郎本・明州本・秀州本・建州本)

本)、以上のテクストは「道人、得道人也。丹經、九転之法。方士、術士也。玉液、謂玉膏。」と注しており、集注本がこれらを省いたのは、李善注(「道人、方術之士也」)、『文選鈔』(「道人、謂得道之人」)と重複するためであろう。

〔訳〕

李善はいう、道人は、方術の士である。これについてはすでに「述哀詩」に見えている。『神仙伝』には、「淮南王は道術の士を好んだ。そこで八公は彼のもとに往き、かくて『丹經』を授けた」という。『漢書』には、「燕や齊の方士たち」とある。傅玄の『求仙篇』には、「玉液は華泉より涌き出る」という。また『楚辞』には、「玉液を吸って渴きをとめる」とある、と。

『文選鈔』にいう、道人は、道を体得した人のことをいう。丹經は、石の中心を取ることである。この丹經の方法や、玉石を練る方法は、いずれも石の中心を取るものである。だから丹經というのである。これについては、淮南王劉安と八公の『丹經』一卷、陶隱居の『仙方丹經』三巻がある。また淮南王の文集中には『鴻宝書』なるものがある。

練丹して黄金を作り、黄金ができて、それによって器を作れば、神仙を見ることができ、また蓬萊山に遊ぶことができるのである。また『抱朴子』の内篇には神丹九転の法というものがあり、これによって不老長生を行うことができるが、それを記した典籍ついて詳しくは挙げていない。おなじく『抱朴子』には、朱草の汁に玉を漬すと、玉が消えて水状のものにさせることができる。これを飲めば不老不死となる」という。朱草は瑞凶に生えている。方士は、方術を具えた人のことである。玉の汁を練って薬草に混ぜ、さらに煮て液体とする。これを服用すると不老長生を得ることができ、『漢武帝故事』には、「西王母の最上の薬は、金漿・玉津である」とある、と。

『文選音決』にいう、液は、音は亦、と。
張銑はいう、玉液は、玉膏のことである、と。

〔注〕

① 已見述哀詩 江淹の雑体詩「潘黃門〔述哀〕岳」(『文選』卷三十一、集注本では卷六十一)に、「我慙北海術、爾無帝女靈。(我れ北海の術を慙ぢ、爾帝女の靈無し)」とあ

るのをさす。

② 神仙伝曰……遂授以丹經 以下の李善が引く同文は現在の『神仙伝』にはみえない。卷四「劉安」に、「乃天下道書、及方術之士、不遠千里、卑辞重幣、請致之。於是乃有八公詣門、皆鬚眉皓白。……安乃日夕朝拜、供進酒脯、各試其向所言。千變万化、種種異術、無有不效。遂授王丹經三十六卷。(乃ち天下の道書、方術の士に及び、千里を遠しとせず、辞を卑くし幣を重ね、請うて之を致す。是に於いて乃ち八公有りて門に詣り、皆な鬚眉皓白たり。……安乃ち日夕朝拜し、酒脯を供進し、各おの其の向の言う所を試みれば、千變万化、種種の異術、效ならざる有る無し。遂に王に丹經三十六卷を授く)」とあるのが最も近い内容であり、劉安が道術を記した典籍や方士を好んで諸国から招致し、そのなかの八公なる八人の仙人のもとで教えを受け、やがて『丹經』三十六卷を授けられたことが記されている。

③ 漢書曰、燕齊之方士 『漢書』卷二十五「郊祀志上」に、「騶衍以陰陽主運顯於諸侯。而燕齊海上之方士、伝其術不能通。然則怪迂阿諛苟合之徒、自此興、不可勝數也。(騶衍は陰陽主運を以て諸侯に顯る。而して燕・齊の海上の方

士、其の術を伝うれども通ずること能わず。然らば則ち怪迂阿諛苟合の徒、此れ自り興り、勝げて数うべからざるなり」とみえる。また『史記』卷二十八「封禪書」にも同文がみえている。

④ 傅玄求仙篇曰、玉液涌出華泉 傅玄（建安二十二年（二一七）～咸寧四年（二七八））は、魏、西晋の政治家・文学者。字は休奕、諡は剛。北地郡泥陽県（現在の陝西省耀県の東南）の人。若くして父傅幹を失い貧窮に苦しんだが、博学にして、とりわけ文章と音楽を長じた。魏の末に秀才に挙げられ、西晋の初めに散騎常侍となる。やがて武帝に諫言する任にあたり、多くの諫議文を上奏した。のちに太僕・司隸校尉となった。伝は『晋書』卷四十七に立てられており、それによれば「文集百余卷」のほか、『傅子』一二〇巻などの著述を残したとあるが、現存するものはごくわずかである。この「求仙篇」についてもすでに散佚しており、その内容については詳らかではない。

⑤ 楚辞曰、吮玉液兮止渴 『楚辞』九思「疾世」に、「吮玉液兮止渴、齧芝華兮療飢。（玉液を吮いて渴きを止め、芝華を齧みて飢を療す）」とみえ、王逸は「玉液、瓊蘂之精氣。

芝、神草也。渴啜玉精、飢食芝華、欲僊去也。（玉液は、瓊蘂の精氣なり。芝は、神草なり。渴けば玉精を啜り、飢れば芝華を食い、僊去せんと欲するなり）」と注する。

⑥ 淮南王八公丹經一卷 淮南王劉安が八公から『丹經』を授かったことは先の『神仙伝』の記載にみえるが、ここでは三十六巻に作り『文選鈔』とは異なる。その名の示す通り、煉丹の方法を記した丹書の類であろうが、伝存やその詳しい内容については未詳。

⑦ 陶隱居仙方丹經三卷 「陶隱居」は、陶弘景（孝建三年（四五六）～大同二年（五三六））のこと。南朝梁の道士、医者、また道教の茅山派の開祖でもある。字は通明。号は華陽隱居、晩年には華陽真逸と称した。丹陽郡秣陵（現在の江蘇省南京市）の人。南朝斉の高帝の時に仕官して左衛殿中將軍に任ぜられたが、三十六歳で致士して句曲山（茅山）に隱遁した。その頃に孫游岳に符図や經法を授かり、またあまねく名山を歴訪して仙薬を求めた。時の武帝は陶弘景の才を愛し、その招聘には応じなかったが、元号の選定や軍事などたびたび国の大事について諮問を受けた。そのため世の人々は陶弘景を「山中宰相」と称した。死後、貞白先生と諡された。

著作は『集注毛詩』二十四卷、『三礼目錄』一卷、『天儀說要』一卷、『肘後方』六卷、『梁隱居先生陶弘景集』三十卷、『陶弘景内集』十五卷（以上、『隋志』に拠る）、『帝王年歴』五卷、『草堂法師伝』一卷、『周氏冥通記』一卷、『老子』四卷、『真誥』十卷、『登真隱訣』二十五卷、『真人水鏡』十卷、『握鏡』一卷、『太清玉石丹葉要集』三卷、『補肘後救卒備急方』六卷、『効驗方』十卷（以上、『旧唐書』経籍志に拠る）など多数あるが、なかでも中国最古の葉学書である『神農本草経』を整理編纂して『本草経集注』七卷を著したことには特に知られている。伝は『梁書』卷五十一「処士」、『南史』卷七十六「隱逸下」に立てられている。なお「仙方丹經三卷」については歴代の目録にも著録されておらず未詳。

⑧ 鴻宝書 佚書。神仙が鬼神を役使して金を作らせる道術などを中心に記述したものらしいが、その詳しい内容については不明。この書名は『漢書』卷三十六「楚元王伝」に附載されている劉向伝に、「上復興神仙方術之事。而淮南有枕中鴻宝苑秘書。書言神仙使鬼物為金之術、及鄒衍重道延命方。世人莫見。（上）（宣帝）復た神仙方術の事を興す。而して淮南に枕中鴻宝苑秘書有り。書は神仙の鬼物をして

金を為らしむる術、及び鄒衍の道を重んじ命を延ばす方を言う。世人見るもの莫し」とみえ、顔師古は「鴻宝苑秘書、並道術篇名。藏在枕中、言常存録之不漏泄也。（師古曰わく、鴻宝・苑秘の書は、並びに道術の篇名なり。藏して枕中に在り、常に之を存録して漏泄せざるを言うなり）」と注しており、『鴻宝』と『苑秘』の二書としてゐるが、現在では一書とするのが通説である。降つて『抱朴子』内篇「論仙」には、「夫作金皆在神仙集中。淮南王抄出、以作鴻宝枕中書。雖有其文、然皆秘其要、文必須口訣、臨文指解、然後可為耳。（夫れ金を作るは皆な神仙の集中に在り。淮南王抄出して、以て鴻宝枕中書を作る。其の文有りと雖も、然れども皆な其の文を秘し、文必ず口訣を須ち、文に臨んで指解し、然る後に為すべきのみ）」といい、また『神仙伝』「劉安」にも、「作内書二十二篇、又中篇八章、言神仙黃白之事、名為鴻宝。万畢三章、論變化之道、凡十万言。（内書二十二篇を作り、又た中篇八章は、神仙黃白の事を言い、名づけて鴻宝と為す。万畢三章は、變化の道を論じ、凡そ十万言なり）」とある。ここでいう「万畢三章」は先の「苑秘」のことで、この佚文については、清の孫馮翼や荊泮林、民国の葉德輝らに

よる『淮南万畢術』一卷（『問經堂叢書』、『十種古佚書』、『観古堂所著書』等所収）などに輯佚されている。また、有馬卓也氏による『淮南萬畢術』訳注（一）、（二）、（三）、（四）（『東洋古典学研究』三四、三五、三六、三七集、二〇一二年十月、二〇一三年五月、二〇一三年十月、二〇一四年五月）がある。

⑨又抱朴子内篇……其經不復備舉 『抱朴子』内篇「金丹」にはつぎのようにある。

一転之丹、服之三年得仙。二転之丹、服之二年得仙。三転之丹、服之一年得仙。四転之丹、服之半年得仙。五転之丹、服之百日得仙。六転之丹、服之四十日得仙。七転之丹、服之三十日得仙。八転之丹、服之十日得仙。九転之丹、服之三日得仙。若取九転之丹、内神鼎中、夏至之後、爆之鼎熱、内朱兎一斤於蓋下、伏伺之候、日精照之、須臾翕然俱起、煌煌輝輝、神光五色、即化為還丹。取而服之一刀圭、即白日昇天。又九転之丹者、封塗之於土釜中、糠火、先文後武。其一転至九転、遲速各有日数多少。以此知之耳。其転数少、其薬力不足。故服之用日多、得仙遲也。其転数多、薬力盛。故服之用日少、而得仙速也。

（一転の丹、之を服すること三年にして仙なるを得ん。二転の丹、之を服すること二年にして仙なるを得ん。三転の丹、之を服すること一年にして仙なるを得ん。四転の丹、之を服すること半年にして仙なるを得ん。五転の丹、之を服すれば百日にして仙なるを得ん。六転の丹、之を服すること四十日にして仙なるを得ん。七転の丹、之を服すること三十日にして仙なるを得ん。八転の丹、之を服すること十日にして仙なるを得ん。九転の丹、之を服すること三日にして仙なるを得ん。若し九転の丹を取りて、神鼎の中に内れ、夏至の後、之を鼎熱に曝し、朱兎一斤を蓋下に内れ、伏して之が候を伺い、日精之を照せば、須臾にして翕然として俱に起り、煌煌輝輝として、神光五色あり、即ち化して還丹と為る。取りて之を服すること一刀圭なれば、即ち白日天に昇る。又た九転の丹は、之を土釜の中に封塗し、糠火は、先に文ゆるやかにし後に武たけくす。其の一転より九転に至るまで、遅速各おの日数の多少有り。此を以て之を知るのみ。其の転数少ければ、其の薬力足らず。故に之を服するときは日を用うることも多くして、仙を得ること遅きなり。其の転数多けれ

ば、薬力盛んなり。故に之を服するときは日を用うること少くして、仙を得ること速やかなり)

⑩又云……飲之不死 同じく『抱朴子』『金丹』にはつぎのような記載がある。

又和以朱草、一服之、能乘虚而行雲。朱草状似小棗、栽長三四尺、枝葉皆赤、莖如珊瑚。喜生名山岩石之下。刻之汁流如血。以玉及八石金銀投其中、立便可丸如泥。久則成水、以金投之、名為金漿、以玉投之、名為玉醴。服之皆長生。

(又た和するに朱草を以てし、一たび之を服すれば、能く虚に乗りて雲を行く。朱草の状は小棗に似て、栽長三四尺、枝葉は皆な赤く、莖は珊瑚の如し。喜んで名山の岩石の下に生ず。之を刻めば汁流れて血の如し。玉及び八石・金銀を以て其の中に投ずれば、立ちどころに便ち丸まりて泥の如くなるべし。久しうすれば則ち水と成り、金を以て之に投ずれば、名づけて金漿と為し、玉を以て之に投ずれば、名づけて玉醴と為す。之を服すれば皆な長生す)

⑪漢武帝故事……有金漿玉津也 『漢武故事』(魯迅『古

小説鈎沈』に拠る)に、「母曰、其太上之薬、有中華紫蜜、雲山朱蜜、玉液金漿。其次薬有五雲之漿、風実雲子、玄霜絳雪。上握蘭園之金精、下摘円丘之紫柰。(母曰わく、其の太上の薬には、中華の紫蜜、雲山の朱蜜、玉液の金漿有り。其の次の薬には五雲の漿、風実雲子、玄霜絳雪有り。上には蘭園の金精を握り、下には円丘の紫柰を摘む)」とみえる。また『芸文類聚』卷八十一「薬」に引く『漢武内伝』には、「西王母謂武帝曰、其太上之薬、乃有風実雲子、玉津金漿。(西王母 武帝に謂いて曰わく、其の太上の薬には、乃ち風実雲子、玉津の金漿有り)」とある。

07 08 【朱霞入窓牖 曜靈照空隙】

李善曰、十洲記曰、朱霞九光。広雅曰、曜靈、日也。説文曰、隙、壁際也。

鈔曰、朱霞、日辺赤雲。山既高入雲、故雲霞入窓牖中也。曜靈、日御也。空隙、壁孔。言高故相照当。

音決、牖、音酉。霞、音霞。

周李翰曰、隙、穴也。言所居高也。

今案鈔音決、霞為赧也。

李善曰わく、十洲記に曰わく、朱霞に九光あり、と。広雅に曰わく、曜靈は、日なり、と。説文に曰わく、隙は、壁際なり、と。

鈔に曰わく、朱赧、日辺の赤雲なり。山既に高くして雲に入るが故に雲霞窓牖中に入るなり。曜靈は、日御なり。空隙は、壁孔なり。高きが故に当を相い照らすを言う、と。

音決に、牖は、音酉。赧は、音霞、と。

周李翰曰わく、隙は、穴なり。居る所の高きを言うなり、と。

今鈔・音決を案ずるに、霞を赧と為すなり。

〔校勘〕

○広雅曰曜靈日也 該当箇所無し（明州本・秀州本）

○壁際也 「壁縫也」へ尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本・秀州本・建州本）

○周李翰曰 「翰曰」へ陳八郎本・明州本・秀州本・建州

本）集注本は「李周翰」の誤倒。

○言所居高也 「言所居之处高也」へ陳八郎本・明州本・秀州本・建州本）

〔訳〕

李善はいう、『十洲記』に、「朱い雲が美しい輝きをはなっている」という。『広雅』には、「曜靈は、日のことである」という。『説文』には、「隙は、壁ぎわである」という、と。

『文選鈔』にいう、朱赧は、日に近いところにある赤い雲のことである。山はとも高く聳えて雲に入り、それゆえに雲やもやが窓から中に入り込むのである。曜靈は、日のことである。空隙は、壁の隙間をいう。これは高所ゆえに日光がその場所を照らすことをいうのである、と。

『文選音決』にいう、牖は、音は酉。赧は、音は霞、と。

李周翰はいう、隙は、穴である。自分の居る場所が高いことをいうのである、と。

今、『文選鈔』と『文選音決』を調べてみると、霞を赧に作っている。

〔注〕

①十洲記曰、朱霞九光

『海内十洲記』「崑崙」に、「其

北戸山承淵山、入有墉城。金台玉楼相映、如流精之欠。光

碧之堂、瓊華之室、紫翠丹房、景雲燭日、朱霞九光、西王

母之所治也。（其の北には戸山・承淵山、入りて墉城有り。

金台玉楼相映すること、流精の欠くるが如し。光碧の堂、

瓊華の室、紫翠の丹房、景雲に燭日あり、朱霞に九光あり。

西王母の治むる所なり」とみえる。

②広雅曰、曜靈、日也

『広雅』卷九上、釈天「異祥」

に、「朱明曜靈東君、日也。（朱明・曜靈・東君は、日なり）」

とみえる。

③説文曰、隙、壁際也

『説文解字』卷十四下「阜部」

に、「隙、壁際也。从阜从尙、尙亦声。（隙は、壁際なり。

阜に从い尙に从い、尙は亦た声）」とみえる。

09 10 【傲睨擿木芝 凌波采水碧】

李善曰、江賦曰、氷夷倚浪以傲睨。本草経曰、紫芝、一

名木芝。洛神賦曰、凌波微步。江賦曰、水碧潜珉。山海経

曰、耿山多水碧。郭璞曰、碧亦玉也。

鈔曰、傲睨、不拘於俗、自得之貌。莊子曰、独与天地精

初往、而不傲睨於万物。碧、水玉之類。赤松子所餌。

音決、傲、五誥反。睨、魚計反。擿、知革反。

呂延濟曰、傲睨、縦誕貌也。水玉、仙薬也。

李善曰わく、江の賦に曰わく、氷夷 浪に倚りて以て傲睨

す、と。本草経に曰わく、紫芝は、一に木芝と名づく、と。

洛神の賦に曰わく、波を凌いで微歩す、と。江の賦に曰わ

く、水碧潜珉あり、と。山海経に曰わく、耿山水碧多し、

と。郭璞曰わく、碧も亦た玉なり、と。

鈔に曰わく、傲睨は、俗に拘わらずして、自得する貌。

莊子に曰わく、独り天地の精と初めて往きて、万物に傲睨

せず、と。碧は、水玉の類。赤松子の餌う所なり、と。

音決に、傲は、五誥の反。睨は、魚計の反。擿は、知革

の反、と。

呂延濟曰わく、傲睨は、縦誕の貌なり。水玉は、仙薬な

り、と。

〔校勘〕

○氷夷倚浪以傲睨 「水夷倚浪以傲睨」(尤刻本)、「馮夷倚浪以傲睨」(秀州本)

○一名木芝 「一名水芝」(明州本)

○呂延濟曰……水玉仙葉也 「濟曰傲睨縱誕貌木芝紫芝別名碧玉也水玉仙葉也」(陳八郎本・明州本・秀州本)、「濟曰傲睨縱誕貌木芝紫芝別名水玉仙葉」(建州本)

〔訳〕

李善はいう、「江賦」に、「氷夷は波に乗って驕り高ぶる」とある。『本草経』には、「紫芝は、あるいは木芝とよばれる」とある。「洛神賦」には、「波を乗り越えて、その上をゆつくりと歩く」とある。また「江賦」に、「水碧・潜珉がある」とある。『山海経』には、「耿山には水碧が多い」とあり、これについて郭璞は、「碧も同じく玉である」という、と。

『文選鈔』にいう、傲睨は、世俗に束縛されることなく、

自らその状態に満足して楽しむさまである。『莊子』には、「天地自然の神妙な働きとはじめて往来しながら、万物において驕りたかぶるようなことはない」とある。碧は、水晶の類であり、赤松子が服用したものである、と。

『文選音決』にいう、傲は、五誥の反。睨は、魚計の反。摘は、知革の反、と。

呂延濟はいう、傲睨は、勝手気ままにふるまうさまである。水玉は、仙葉である、と。

〔注〕

①江賦曰、氷夷倚浪以傲睨 郭璞「江賦」に、「氷夷倚浪以傲睨、江妃含嚙而臨眇。(氷夷浪に倚りて以て傲睨し、江妃嚙を含んで臨眇す)」とみえる。「氷夷」は、水神の名。『山海経』卷十二「海内北経」に、「従極之淵、深三百仞、維氷夷恒都焉。氷夷人面、乗両龍。(従極の淵、深さ三百仞、維氷夷恒に都す。氷夷人面にして、両龍に乗る)」とあり、郭璞は「氷夷は、馮夷なり」と注する。また「傲睨」について、李善は「自寛縦不正之貌。(自ら寛縦にして正しからざる貌)」という。

②本草経曰、紫芝、一名木芝 『本草経』は、『神農本草経』のこと。佚書。全三卷、あるいは四卷といわれる。著者未詳。中国最古の本草書であり、成立は紀元前後から後漢、三国時代と説が分かれている。内容は一年の日数にあわせた三百六十五の鉱物、植物、動物由来の生薬を上中下品に分けて記載したものである。この条は、たとえば、森立之輯『神農本草経』（嘉永七年序刊）巻上「紫芝」などに輯佚されている。

③洛神賦曰、凌波微歩 魏の曹植「洛神賦」（『文選』巻十九）に、「陵波微歩、羅韞生塵。（波を陵いで微歩し、羅韞塵を生ず）」とみえる。この詩句について、李善は「陵波而韞生塵、言神人異也。（波を陵いで韞塵を生ずは、神人の異を言うなり）」といい、呂向は「歩於水波之上如塵生也。（水波の上を歩いて塵生ずるが如きなり）」という。

④江賦曰、水碧潜珉 「江賦」に、「其下則金礦丹礫、雲精燭銀、瑠璃璿瑰、水碧潜瑯。（其の下には則ち金礦丹礫、雲精燭銀、瑠璃璿瑰、水碧潜瑯あり）」とみえる。

⑤山海経曰、耿山多水碧 『山海経』巻四「東山経」に、「又南三百里曰耿山、無草木、多水碧、多大蛇。（又た南三

百里を耿山と曰う、草木無く、水碧多く、大蛇多し）」とみえ、その郭璞の注に「亦た水玉の類」とある。

⑥莊子曰……而不傲睨於万物 『莊子』天下篇に、「独与天地精神往来、而不敖倪於万物、不譴是非、以与世俗处。（独り天地の精神と往来して、万物に敖倪せず、是非を譴めず、以て世俗と处る）」とみえる。

⑦赤松子所餌 「赤松子」は、上古の仙人。神農氏のと
きの雨をつかさどる神『列仙伝』巻上「赤松子」に、「赤松子者、神農時雨師也。服水玉、以教神農。能入火自燒。（赤松子なる者は、神農の時の雨師なり。水玉を服して、以て神農に教う。能く火に入りて自ら焼く）」とある。

11 12 【眇然万里遊 矯掌望煙客】

李善曰、神仙伝、若士謂盧敖曰、吾一挙千万里。説文曰、矯、挙手也。郭璞遊仙詩曰、駕鴻乘紫煙。

眇曰、客、言万里遨遊 煙霞之中、去人間為客也。水中生玉芝、涉海向蓬萊上而取之、去地万里至烟霞。康曰、偃佺

以柏実方目、赤松以水玉乘烟。列仙伝曰、甯封子積火自燒而随烟上下。

音決、眇、亡小反。

呂延濟曰、煙客、仙人也。

李善曰わく、神仙伝にいう、若の士 盧敖に謂いて曰わく、吾れ一挙にして千万里す、と。説文に曰わく、矯は、手を挙ぐるなり、と。郭璞の遊仙詩に曰わく、鴻を駕して紫煙に乗る、と。

鈔に曰わく、客は、万里にして煙霞の中を遨遊し、人間を去りて客と為るを言うなり。水中玉芝を生ずるに、海を涉つて蓬萊上に向かいて之を取り、地を去ること万里にして烟霞に至る。嵇康曰わく、僮僮は柏の実を以て方目たり、赤松は水玉を以て烟に乗る、と。列仙伝に曰わく、甯封子は火を積んで自ら焼き、而して烟に随いて上下す、と。

音決に、眇は、亡小の反、と。

呂延濟曰わく、煙客は、仙人なり、と。

〔校勘〕

○神仙伝……吾一挙千万里 「神仙伝曰……吾一挙千里」
（尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本・秀州本・建州本）
○矯挙手也 「矯挙也」（尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本・秀州本・建州本）

○呂延濟曰煙客仙人也 「濟曰矯掌挙手也煙客仙人也」（陳八郎本・明州本・秀州本・建州本）

〔訳〕

李善はいう、『神仙伝』には、「ある道士が盧敖に、『わしは一度で千里の彼方まで達することができる』といった」とある。『説文』には、「矯は、手を挙げることである」という。郭璞の「遊仙詩」には、「大鳥を乗り物として操り紫の雲気に乗ってゆく」とある、と。

『文選鈔』にいう、客とは、万里の彼方で雲気の中を自由に遊びまわり、世俗から離れて客となることをいうのである。水中で玉芝が生じれば、海を渡つて蓬萊山まで赴いてこれを採取し、地上から遠く万里を離れて雲気に至るのである。嵇康はいう、「僮僮は柏の実を食らうことによつて四角い目となり、赤松は水晶を食らうことによつて雲気に

乗るようになった」と。『列仙伝』には、「甯封子は火を積みあげて自らの体を焼き、そしてその煙に乗って上昇したり下降したりした」とある、と。

『音決』にいう、眇は、亡小の反、と。

呂延濟はいう、煙客とは、仙人のことである、と。

〔注〕

① 神仙伝……吾一挙千万里 この一文、いまの『神仙伝』にはみえず、輯佚がなされていないところからすると、おそらくは佚文であろう。「盧敖」は、戦国、燕の人。始皇帝の命を受け、博士となって神仙を求めたが、のちに亡命した。『淮南子』卷十二「道応訓」につきのように同文がみえる。

盧敖游乎北海、……見一士焉。深目而玄鬢、淚注而鳶肩、豊上而殺下、軒軒然方迎風而舞。顧見盧敖、慢然下其臂、遯逃乎碑。盧敖就而視之、方倦龜殼而食蛤梨。盧敖与之語曰、唯敖為背群離党。窮觀於六合之外者、非敖而已乎。敖幼而好游、至長不渝。周行四極、唯北陰之未闕、今卒睹夫子於是。子殆可与敖為友乎。若士者、齟然而笑曰、

嘻、子中州之民。寧肯而遠至此。此猶光乎日月而載列星、陰陽之所行、四時之所生。其比夫不名之地、猶突奧也。若我、南游乎岡寰之野、北息乎沈墨之鄉、西窮窅冥之党、東開鴻濛之先。此其下無地而上無天、聽焉無聞、視焉無矚。此其外猶有汰沃之汜。其余一舉而千万里、吾猶未能之在。今子游始於此。乃語窮觀、豈不亦遠哉。然子处矣。吾与汗漫、期于九垓之外。吾不可以久駐。若士举臂而竦身、遂入雲中。……

（盧敖北海に遊び、……一士を見る。深目にして玄鬢、淚注にして鳶肩、豊上にして殺下、軒軒然として方に風を迎えて舞う。顧みて盧敖を見、慢然として其の臂を下し、碑に遯逃す。盧敖就きて之を視れば、方に龜殼に倦まりて蛤梨を食らう。盧敖之と語りて曰わく、唯だ敖のみ群に背き党を離ると為す。六合の外に窮觀する者は、敖のみに非ざるか。敖幼にして游を好み、長ずるに至りて渝せず。四極を周行するも、唯だ北陰のみ之れ未だ闕わざるに、今卒に夫子を是に睹る。子殆んど敖と友為るべきか、と。若の士なる者、齟然として笑いて曰わく、嘻、子中州の民なり。寧んぞ肯えて遠く此に至れるや。

此れ猶お日月に光らされて列星を戴き、陰陽の行る所、四時の生ずる所なり。其れ夫の不名の地に比すれば、猶お突奥のごときなり。我の若きは、南は岡哀の野に遊び、北は沈墨の郷に息い、西は宵冥の党を窮め、東は鴻濛の先を開く。此れ其の下に地無くして、上に天無く、聴けども聞ゆること無く、視れども矚ゆること無し。此れ其の外に猶お汰沃の汜有り。其の余は一挙にして千万里なるも、吾れ猶お未だ之に在ること能わず。今子の遊ぶこと此に始まる。乃ち窮観を語ること、豈に亦た遠からずや。然れども子処れ。吾れ汗漫と、九垓の外に期す。吾れ以て久しく駐まるべからず、と。若の士臂を挙げて身を竦ませ、遂に雲中に入る)

②説文曰、矯、挙手也 『説文解字』五下「矢部」には、「矯、揉箭箝也。从矢、喬声。(矯は、箭を揉る箝なり。矢に従う、喬の声)」とあり、李善の引用とは異なる。また、「十二上「手部」には、「擣、挙手也。从手、喬声。一曰、擣、擅也。(擣は、手を挙ぐるなり。手に従う、喬の声。一に曰わく、擣は、擅なり、と)」とあり、恐らくは李善はこれに基づいていると考えられる。「矯」と「擣」の文字について、

段玉裁は「引申之、凡挙皆曰擣。古多段矯為之。陶淵明曰、時矯首而遐觀。王逸注楚辭曰、矯、挙也。(之を引申して、凡そ挙は皆な擣と曰う。古えは多く矯を段りて之と為す。陶淵明(帰去来辞)曰わく、時に首を矯げて遐觀す、と。王逸楚辭(九章「惜誦」)に注して曰わく、矯は、挙なり、と)」と注する。

③郭璞遊仙詩曰、駕鴻乘紫煙 「遊仙詩」其三に、「赤松臨上遊、駕鴻乘紫煙。(赤松は上遊に臨み、鴻を駕して紫煙に乗る)」とみえる。「赤松」は、前述の赤松子。『列仙伝』卷上「赤松子」に、「赤松子者、神農時雨師也。服水玉、以教神農。能入火自燒。往往至崑崙山上、常止西王母石室中、隨風雨上下。炎帝少女追之、亦得仙俱去。至高辛時、復為雨師。今之雨師、本是焉。(赤松子なる者は、神農の時の雨師なり。水玉を服し、以て神農に教う。能く火に入りて自ら燒く。往往にして崑崙山上に至り、常に西王母の石室の中に止まり、風雨に隨いて上下す。炎帝の少女之を追い、亦た仙を得て俱に去る。高辛の時に至り、復た雨師と為る。今の雨師は、是れに本づくなり)」とある。また『搜神記』卷一「赤松子」(もと『法苑珠林』卷七十九に引く)にもこ

れときわめて類似する文がみえる。

④ 嵇康曰……赤松以水玉乘烟 嵇康「答難養生論」（戴明

揚『嵇康集校注』卷第四所収）に、「僊侏以松実方目、赤松以水玉乘烟。（僊侏は松の実を以て方目たり、赤松は水玉を以て烟に乗る）」とみえる。「僊侏」は、上古の仙人。『列仙伝』卷上「僊侏」に、「僊侏者、槐山採薬父也。好食松実。形体生毛、長数寸、両目更方。能飛行、逐走馬。以松子遺堯、堯不暇服也。松者、簡松也。時人受服者、皆至二三百歲焉。（僊侏なる者は、槐山の採薬の父なり。好んで松の実を食らう。形体に毛を生ずること、長さ数寸にして、両目は更に方たり。能く飛行して、走馬を逐う。松の子を以て堯に遺るも、堯服するに暇あらざるなり。松は、簡松なり。時人受けて服する者、皆な二三百歳に至る）」とある。これも『搜神記』卷一「僊侏」（もと『法苑珠林』卷七十八に引く）にもこれとほとんど同じ文章がみえる。

⑤ 列仙伝曰、甯封子積火自燒而随烟上下 『列仙伝』卷上「甯封子」に、「甯封子者、黄帝時人也。世伝為黄帝陶正。有人過之、為其掌火、能出五色煙。久則以教封子。封子積火自燒、而随煙氣上下。視其灰燼、猶有其骨。時人共葬於

甯北山中。故謂之甯封子焉。（甯封子なる者は、黄帝の時の人なり。世よ伝えて黄帝の陶正と為る。人の之に過ぐる有り、其の為に火を掌るに、能く五色の煙を出す。久しうして則ち以て封子に教う。封子火を積みて自ら焼き、而して煙氣に随いて上下す。其の灰燼を視るに、猶お其の骨有り。時人共に甯北の山中に葬る。故に之を甯封子と謂う）」とみえる。やはり『搜神記』卷一「甯封子」（もと『法苑珠林』卷一百一十五に引く）にもこれとほぼ同文がみえる。

13 14 【永得安期術 豈愁濛汜迫】

李善曰、列仙伝曰、安期生自言千歲。楚辞曰、日出湯谷、次于濛汜。

鈔曰、列仙伝曰、安期生壳菓於海中、時人言得千歲。始皇請見之、与語三日、錫之玉壁。無何悉捨之而去、留書以玉寫為報焉。又言、後十年、求我於蓬萊山乎。故始皇遣徐福入海求之、風波不得進也。濛汜、日没処。言得長生、不憂老至所迫。天文志云、日至于悲泉、是謂懸車、至于虞淵、

是謂黃昏、至于濛汜、是謂人定。

音決、汜、音似。迫、音伯。

呂延濟曰、安期、古仙人。術、仙方。言得此仙方、不愁歲月之迫於濛汜也。

陸善經曰、濛汜迫、方暮年也。

李善曰わく、列仙伝に曰わく、安期生 自ら千歳と云う、と。楚辞に曰わく、日は湯谷より出でて、濛汜に次る、と。

鈔に曰わく、列仙伝に曰わく、安期生 葉を海中に売り、時人 千歳を得ると云う。始皇 之に見えんことを請い、与に語ること三日、之に玉壁を錫う。何ばくも無くして悉く之を捨てて去り、書を留めて玉鳥を以て報と為す。又た云う、後十年、我を蓬萊山に求めんか、と。故に始皇 徐福を遣わして入海して之を求めしむるも、風波ありて進むを得ざるなり。濛汜は、日の没する処なり。言うところは長生を得て、老いの至りて迫る所を憂えざるなり。天文志に云う、日 悲泉に至る、是れを懸車と謂い、虞淵に至る、是れを黃昏と謂い、濛汜に至る、是れを人定と謂う、と。音決に、汜は、音似。迫は、音伯、と。

呂延濟曰わく、安期は、古の仙人なり。術は、仙方なり。言うところは此の仙方を得なば、歲月の濛汜に迫るを愁えざるなり、と。

陸善經曰わく、濛汜の迫るは、方に暮年ならんとするなり、と。

〔校勘〕

○安期生自言千歳 「安期先生自言千歳」(尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本・秀州本・建州本)

○日出湯谷 「出於湯谷」(尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本・秀州本・建州本)

○呂延濟曰……術仙方……不愁歲月之迫於濛汜也 「濟曰……術仙方也濛汜日入之処……不愁歲月迫於濛汜」(陳八郎本・明州本・秀州本・建州本)

〔訳〕

李善はいう、『列仙伝』には、「安期生が自ら千歳であるといった」とある。『楚辞』には、「太陽は明け方に湯谷よりあらわれて、暮れ時には濛汜に宿る」とある、と。

『文選鈔』にいう、『列仙伝』には、「安期生は、海中で薬を売っており、当時の人々は彼が千歳もの長寿を得ていると口々にいつていた。そこで始皇帝は安期生に会いたいと申し入れ、共に三日三晩語り合い、彼に玉璧を与えた。しかし安期生はいく日もたたないうちに、これを捨てて立ち去り、書面を遺して玉の鴛鴦をその返礼としたのである。さらに安期生は、『のち十年して、私を蓬萊山まで捜しに来てもらいたい』といった。そのため始皇帝は徐福を海へ派遣して安期生を捜索させたが、風浪に遭って先に進むことができなかった」という。濛汜は、太陽が沈む場所である。したがって、ここでは安期生の術で長生を得ることによって、老いが差し迫るのを憂える必要がなくなることをいっているのである。天文志には、「太陽が悲泉に至る時分を懸車といひ、虞淵に至る時分を黄昏といひ、濛汜に至る時分を人定という」とある、と。

『文選音決』にいう、汜は、音は似。迫は、音は伯、と。呂延濟はいう、安期は、古の仙人である。術は、仙人の用いる方術のことである。ここでは、安期の用いた仙術を会得することによって、歳月があたかも濛汜に沈む太陽の

ごとく、人が老年に差し迫ることを憂える必要がなくなることをいっているのである、と。

陸善経はいう、濛汜が迫るとは、まさに人が老年に差し加かるうとすることである、と。

〔注〕

①列仙伝曰、安期生自言千歳 『列仙伝』卷上「安期生」に、「安期先生者、琅邪阜郷人也。売薬於東海辺。時人皆言千歳翁。秦始皇東遊、請見、与語三日三夜、賜金璧度数十万、出於阜郷亭、皆置去。留書以赤玉鴛一量為報、曰、後数年、求我於蓬萊山。始皇即遣使者徐市盧生等数百人入海、未至蓬萊山、輒逢風波而還。立祠阜郷亭海辺十数处云。（安期先生は、琅邪の阜郷の人なり。薬を東海の辺に売る。時人皆な千歳の翁と言う。秦の始皇の東遊するや、見えんことを請い、与に語ること三日三夜、金璧を賜うこと数十万に渡るも、阜郷亭より出づるや、皆な置き去る。書を留めて赤玉の鴛一量を以て報と為し、曰わく、後数年、我を蓬萊山に求めよ、と。始皇即ち使者の徐市・盧生ら数百人を遣わして海に入らしむるも、未だ蓬萊山に至らざるに、

輒ち風波に逢いて還る。祠を阜郷亭の海辺十数処に立つと云う」とみえ、ここでは他人が千歳翁と称したという。

②楚辞曰……次于濛汜 『楚辞』天問に、「出自湯谷、次于蒙汜。自明及晦、所行幾里。（湯谷自り出でて、蒙汜に次る。明自りして晦に及ぶ、行く所幾里ぞ）」とみえ、王逸は「次、舍也。汜、水涯也。言日出東方湯谷之中、暮入西極蒙水之涯也。（次は、舍なり。汜は、水涯なり。言うところは日は東方湯谷の中より出でて、暮には西極蒙水の涯に入るなり）」と注する。

③天文志云……是謂人定 ここでいう「天文志」は『淮南子』天文訓をさす。そこには、「至于悲泉、爰止其女、爰息其馬、是謂県車。至于虞淵、是謂黄昏。至于蒙谷、是謂定昏。日入于虞淵之汜、曙於蒙谷之浦、行九州七舍、有五億万七千三百九里、禹以為朝昼昏夜。（悲泉に至りて、爰に其の女を止め、爰に其の馬を息わしむ、是れを県車と謂う。虞淵に至る、是れを黄昏と謂う。蒙谷に至る、是れを定昏と謂う。日虞淵の汜に入り、蒙谷の浦に曙く、九州七舍を行ること、五億万七千三百九里有り、禹ちて以て朝昼昏夜と為す）」という。

（筑波大学大学院人文社会科学研究所博士課程）